

日本感性工学会設立の経過

日本感性工学会会長 鈴木 邁



日本感性工学会が設立されるまでの経過についてご報告する。

日本学術会議第15期の終盤、第5部の材料工学研究連絡委員会（以後材研連と略記）において、感性工学についての検討が議論され、小委員会設立の可能性が討議された。

ここで、会員諸氏に学術会議の組織等についてご説明したい。学術会議は7部から構成されており、第1部文学系、第2部法学系、第3部経済学系、第4部理学系、第5部工学系、第6部農学系、第7部医学系に分類されていて、任期は3年となっている。各学会からの推薦候補者の中から、会議員が選挙によって決定され、専門別に委員会が設置される。会議員の他に専門委員が参画し、委員会が運営される。専門委員の中から各委員会の運営幹事が選ばれ会議員と協力して、それぞれの学問分野の向上・発展のための施策が議論され、成果はそのときの内閣総理大臣に上申される。このような意味で、学術会議は学者の国会であるといわれている。

我々は工学系であるので第5部に所属し、私の専門は材料科学であるので材研連の専門委員の一員として参画した。その時の材研連会議員の方々は開明な方が多く、感性工学小委員会の設置に積極的に努力されたことを思い出す。研連に新しい学問分野を設置するときは、先ず委員会を設置し、その学問の発展性、先進性等について検討をすることが必要となる。学術会議のきまりで、その委員会は「小」の字をつけ、小委員会組織で運営され、一切の予算措置はとられない。会議は学術会議の割り当てられた会議室が使用できるが、会議のための費用、手当て、交通費は全くつかず自弁である。所謂完全なボランティアシステムになっている。遠くから参加される方は全くお気の毒で申し訳無いといつも思っ

いた。

第16期になって、感性工学小委員会が発足したのであるが、この設立の動機は世界的な工学パラダイム（枠組み）の見直しの気運が醸成されたことに他ならない。

1980年代、世界的な工学に対する見直しの気運が高まり、特にアメリカでは半導体産業をはじめとした分野で、日本に追い越されたではないかとする焦りが生じた。同時に、日本の産業界、大学の教育システムの成果が当時の日本の繁栄をもたらしたものと考え、自国の産業及び工学教育の改善に大きな努力がそそがれた。その結果、アメリカ史上空前の発展が達成されたと言われている。

日本でも、工学及び工学教育の改善のための活動が1990年代になって叫ばれ始め、産学官の諸機関が改善実施を進めて来た。このような雰囲気の中で、学術会議の中に新分野である感性工学小委員会が設置されたわけである。

この期の材研連の学術会議員は、内田盛也第5部長（帝人㈱顧問）、宇田川重和（東工大名誉教授）、富永博夫（東大名誉教授）故人、本多健一（東京工芸大学長・東大名誉教授）の各氏である。

感性工学小委員会の構成員は、この領域に関係の深い繊維分野や、デザイン分野の方々の参加が創設期には多かったが、中・後期には機械、情報、電気、化学、文科系の方々にも参加して頂き、20名の組織で運営することになった。委員の大部分は大学関係者であるが、企業からも参加して頂き、感性工学のあるべき姿や、各委員の専門分野における感性領域利用の現状等について、2ヶ月に1回の割合で発表して頂いた。OHPやスライド等によって研究発表会が実施され、熱心な議論が行われた。

これらの発表結果を集大成すべく、平成7年12月

に学術会議大講堂で、第1回感性工学学術シンポジウムを開催、第2回目は平成8年12月に同会場で実施し、両発表会にはそれぞれ百数十人の参加者があり成功裡に終了した。

また、平成8年には3年の時限付ではあるが、科学研究費補助金申請部門が会議員諸氏のご協力によって開設されることになった。

感性関係研究者にとっては、真にエポックメイキングなことであり、感性工学の更なる発展を期待せずにはいられなかった。

平成7年4月、信州大学に感性工学科が開設され、山口大学にも感性デザイン工学科が発足した。国立大学に、このようにして感性分野の学科が設置されたことは、両大学の努力もさることながら、文部省が感性領域の将来の発展性を認めてくれたことになり、画期的なことと言わざるを得ない。

平成10年には、前にも述べたように、学術会議第5部のパラダイムの変更によって、各研連の大幅な改革が実施された。従来の研連は領域別と課題別の研連に改組され、前者は会議員の選出母体として機能し、後者は時代の要請に応えられる研究主体の研

連として出発することになった。

我々の感性工学小委員会は、課題別研連に新設された「人間と工学」研連の感性工学専門委員会に格上げされることになった。

小委員会を通して専門委員会の最大の議題は、感性工学会の開設にあった。平成10年10月、神田の学士会館において、吉川学術会議長を始めとした前掲の学術会議員諸氏のご祝辞をいただき、日本感性工学会が発足した。発起人になって頂いた関係各大学の学長、学部長並びに大学関係者及び企業のトップの方々に深く謝意を表する次第である。

同年10月には筆者の所属していた千葉工業大学の後援によって、第3回感性工学学術シンポジウムが開催され、450名にのぼる参加者が出席し盛大に実施された。

また、第4回の学術シンポジウムは、平成12年の5月に感性情報分野を主とした企画で実施することになっている。

以上、感性工学会の設立に至るまでの経過を概説したが、最後に会員諸氏の学会へのご協力とご鞭撻をお願い申し上げて終わりとす。

著者紹介

鈴木 邁 (すずき・つとむ)

1928年生まれ、横浜工業専門学校(現横浜国大)電気化学科卒。1966年工学博士(東京工大)。1970年千葉大学工学部教授。1986年日本デザイン学会会長。1990年同大工学部長。1991年中国湖南大学名誉教授。学位授与機構造形工学審査委員長、日本学術会議材研連幹事、感性工学小委員会委員長、1993年日本工学アカデミー会員、1994年千葉大学名誉教授、中国無錫軽工業大学名誉教授、日本デザイン学会名誉会員、千葉工大教授。1997年日本学術会議「人間と工学」研連感性工学専門委員会委員長。1998年日本感性工学会初代会長。